
Resist

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e s i s t

【Nコード】

N 2 3 7 9 T

【作者名】

R A N

【あらすじ】

体に宿ったウイルスのせいで魔法を使う派閥を追われることになった女性。

気づくと、対立する科学派の研究所にいた。

そこで女性は、科学派に拘束された少年の世話をすることを頼まれる。

サイト、dノベ転載

霞の道 < 1 >

「いたぞ！ 捕まえる！！」

白い壁ばかりの建物が並ぶ中、大勢の人々が大声を出して走り回っていた。

それに隠れるようにして、一人の女性も、建物の中を走っていた。そして、ついに見つかってしまい、彼女はしょうがないな、という風に眉をひそめ、指を鳴らした。

「飛翔」

静かに言っていると、彼女の周りに風が起こり、女性の体が浮き上がった。

「逃がすな！」

追いかけてきた者達が彼女を取り押さえようと、慌てて走ってくる。

しかし、彼女の飛び立つ際の風にとばされてしまった。

そして、彼女はそのまま上空へ飛び立っていった。

上空に出た女性は、そのままどこか、とりあえず遠くに行こうと考えた。

だが

「レシー」

背後から男性の太い声がした。

自分の名を呼ぶ声に驚いて、女性 レシーは勢いよく振り向いた。

そこには、自分の恋人がいた。

そのなじみのある顔を見た時、レシーの表情が少し揺れた。だが、レシーのくせのある長い髪がそれを少し隠した。

「お前も、私の邪魔をするのか」

レシーは、髪に顔を隠させ、男から少し視線をずらした。

男は表情は変えずに、淡々とレシーに言い放つ。

「組織に協力しないのなら、お前は俺の敵だ。お前が外に出ていくことは許されない」

男はそう言うと、右手に持つ杖を体の前に構えた。

レシーも、その相手の動作の意味を悟り、目を鋭くする。

相手への遠慮は、振り切ることにした。

男もレシーの雰囲気の変化を察して、杖を構えてすぐに、その杖の先を向ける。

しかし

「燃焼」

レシーはその前に手の平を男に向け、そう言葉を発した。

すると、レシーの手の平から彼女の背丈の何倍にもなる炎が、男に向かって放たれた。

男は慌てて、その炎を避ける。

だが、その顔は痛み歪んでいた。肩から腕にかけて少し火傷を負ったようだ。

レシーはその隙を逃さず、男の横に、空気を滑るように移動する。

だが、男も素直にやられる訳ではなかった。

「かまいたち！」

避け様に男は杖を大きく振って、そう叫ぶ。

すると杖から、切るように速く移動する風が出た。

「落石」

レシーが手を上から下へ落とすように動かすと、空から大小様々な岩石が落ちてきた。

空を走る風は、その岩石に当たり、岩を削って勢いが殺されていく。

レシーは平然とした顔でそこにいた。

その様子を見て、男は口の端を持ち上げた。

どこか皮肉に満ちたものだった。

「やはり、これでは埒が明かないな」

「そうだな」

「そう時間をかける訳にはいかないんだ」

「私もだ」

「それなら」

男はそこで笑みをますます濃くした。

「決着をつけよう」

レシーは表情を変えなかったが、そう言うと、すぐに片手を胸の前にあげ、細かく動かす。

男も杖を構え、口の中で言葉を転がす。

そして、互いに動作がひと段落すると、相手を見据え、それぞれ自分のためていた力を解き放った。

辺りは、光に包まれた。

レシーは気づくと、森の中にいた。

そういえば、戦っていたのも森の上だったな、と思い出し、辺りを見回す。

しかし、辺りは霞んでいて、よく見えなかった。

あまり外に出たことのなかったレシーは、地理感覚が全くない。

だが、恐らく建物からはそう離れていないだろうと考え、とりあえず逃げることにした。

辺りは薄暗く、動くのは危険だったが、とにかくレシーは動いていなかった。

見えないからこそ余計に、迫り来る恐怖を耐えるために、体を動かしていたかった。

節々が痛むが、歩けないほどではなかった。

レシーは、腕を押さえ、片足をかばいながら歩いた。すると、だんだんと向こうの方に建物らしき影が見えてきた。

見覚えがないから、自分がいたものとは恐らく違うものだろう。

この時、レシーの意識はまた遠のきかけていた。

建物の入り口らしい、大きな門の前まで来ると、レシーは安心して、倒れこんでしまった。

再び気づくと、目の前には白い天井があった。

レシーは飛び起き、辺りを見回した。

自分はどうかやらベッドの上に寝かされていたようだ。

周りは、ベッドがいくつも並び、窓からは眩しい光が入っていた。やはり、全く見覚えのない場所だった。

「気づきましたか」

すると、いくつかがカーテンで覆われていたベッドの影から男が出てきた。

レシーは驚いて、後ろに手をついて、ベッドを飛び出ようとしたが、やはり体がきしんで、すぐには動けなかった。

「ああ、無理をしてはいけません」

男は、レシーに近寄ると、肩にそっと触れて、レシーをベッドに戻した。

「あな、たは……………」

レシーは、どうやら自分を追っている者ではないと考え、首だけを動かして尋ねた。

男は、レシーをベッドに戻すと、その問いに笑顔で答えた。

彼の髪は細い金髪で、動く度に日の光を反射していた。

「僕はドイルといえます。この研究所で研究をさせてもらってる、しがない学者です」

レシーはその答えを聞いて、しばらく考えるように黙る。

「ここは、どこですか？」

声も少し落ち着きを取り戻し、レシーはまた尋ねる。

「ここは科学派のレントン研究所です。魔法派と科学派の領域の境にあります、町へは車で三十分ぐらいかかります」

「科学派!？」

レシーは思わずベッドから起き上がりそうになるが、後ろに手をついた瞬間、やはり痛みが走り、またベッドへ倒れる。

ドイルは慌ててレシーの背に手を回し、ベッドに優しく寝かせた。

「…………やはり、貴方は魔法派の方ですか？」

ベッドにレシーを寝かせると、ドイルは囁くように聞いた。

レシーは体を大きく震わせる。

しかし、黙っていてもしょうがないとあきらめ、小さくうなずいた。

ドイルはため息を吐きながら、レシーから離れて、見下ろす格好になる。

「…………私は、処分されるのですか」

レシーはドイルを不安げに見上げた。

しかしドイルは、その彼女を笑顔で見る。

「いいえ。科学派の中には魔法派を毛嫌いする方もいますが、この研究所は魔法派との境にもあるためか、明らかに嫌悪感を示す人はあまりいませんよ。なので、処分などという野蛮な真似はいたしません。…………ただ、怪我が治られましたら、頼みたいことがあるの

ですが……」

レシーは、藁にもすがる思いで聞いた。

「それは、私がここにいてもいい、ということですか？」

「ええ。貴方さえよければ、ぜひお願いしたいのです」

「……ここにいらさせてもらえるなら、何でもやります」

魔法の道 <2>

ここは魔法と科学が共存する世界。

しかし、それらは互いに敵対し、次第に土地を住み分けるようになっていった。

そのせいで、領域の境では戦が起こることもあり、彼らはそれぞれ自分達の技術のみを磨いていった。

魔法を使うことを選んだ者は魔法を、科学を探求することを選んだ者は科学の道を選んだ。

そのため、領域を一步超えただけでそこは全くの別世界となる。だから、レシーにとっても、科学派の研究所は見慣れないものでいっぱいだった。

魔法派の研究所には、魔術に使う薬草や宝石などがたくさんあったが、ここは光ったりする大小様々な箱や、太いミミズのようなグロテスクな紐がたくさんあった。

一通り研究所を、レシーはドイルに案内してもらっていた。

「そして、こちらが話をした魔法派の少年がいる部屋です」

ドイルが指し示した所は、部屋というよりは、重い金属の扉で厳重に閉じられている、囚人の入る牢獄のようだった。

レシーは、少しそこで不審そうに眉を寄せた。

ドイルもそれに気づいたのか、レシーに笑顔を向けた。

時間が経つにつれて、レシーは、この笑顔もあまり信用ができない、と思うようになっていった。

「よろしく、お願いしますね」

「はい」

笑顔だったが、声には重みがあった。

彼は絶対に自分の気持ちを探している、とレシーは確信した。

そして、彼女も淡く笑顔を浮かべて答えた。

自分がここにいるためには、彼女はあえて何も触れないことにしたのだ。

そして、ドイルは目の前の重い扉の鍵を開け、レシーに向けて開いた。

すると、暗かった部屋に明かりが入り、奥にいる人物の姿が浮かび上がった。

まず目に入ったのは、鋼が燃えるような色をした赤い髪。

次に、獣のようにぎらついた鋭い目。

部屋の奥には、格子のついた小さい窓があり、その下には少年が座っていた。

ドイルはレシーを中に入れると、少年に近づいた。

少年は変わらず、その鋭い目でドイルを睨んでいた。

「アスリーン、こちらはレシーさんです。貴方と同じ魔法派の方ですよ。今日から貴方の担当に加わりました。同じ魔法派の方ですから、お話ししやすいでしょう。それではレシーさん、あとはお願いしますね。何かあれば、そのインターホンでご連絡を」

そう言つと、ドイルは少年　アスリーンから離れ、扉から出ていった。

そして、重い扉は、錆びついた音を立てて、ゆっくりと閉められた。

外からは暗く見えたが、中に入ると、窓から光が入ってくるので、部屋の中はまだ見える程度には薄暗かった。

レシーは、さてどうしようか、と戸惑いながら、アスリーンを見下ろした。

アスリーンは相変わらず睨みつけたままだ。

レシーはとりあえず、アスリーンの目の前にひざまずいた。

「ドイルさんから先ほど紹介されましたが、レシーです」

とレシーが言ったところで、アスリーンはレシーの胸元を引っ張り、顔を近づけた。

レシーは、驚いて息を詰める。

アスリーンの、獣のようだが、黒く冷えた目がレシーを捕らえた。

「お前は、誰だ」

レシーは動くことができなくなっていた。
しばらく見つめ合う時が過ぎていく。

「答える。さもなくば、殺す」

アスリーンの声に、レシーははたと気づいて、答えた。

「私の名はレシーといいます。ドイルさんが言ったこと以外に、何が聞きたいですか」

「お前から魔力の匂いがする。ここは科学派だ。なぜ魔法派のヤツがここにいる。どういう理由でだ」

「それを言うなら、あなたもでしょう。私は、今までいた場所を追われて、命からがら逃げてきた所をこの方に助けてもらったのです。恐らくあなたのために。あなたこそ、なぜここにいるのか私が聞きたいぐらいですね」

アスリーンの挑発的な姿勢に、レシーもだんだんと負けず嫌いの性格が出てきて、強気な態度になってきた。

「そうか……あいつらが何か企んでたのかと思ったが、それでもないらしいな。悪かった」

アスリーンは、ばつが悪そうに目をそらし、レシーを解放した。

レシーはアスリーンから離れて、その目の前の床に座った。

「まあ、どうせ私もここから出られない。時間はあるから、よければ話してくれ。お前も、どうやらこのままでいたいわけではないよ。うだから。ここがどういう所なのか、全然私はわからないんだ」

「何だよ、急に言葉がくれたな」

「私は相手に合わせて態度を変えるからな。こちらに敬意を払っていないような者には、私もそういう態度で向かうよ」

レシーの言葉に、アスリーンは大声で笑い出した。

レシーはやや面食らってアスリーンを見ていた。

「なるほどねえ。お前面白いわ。そうだな、お互い話し合わないといけないことがあるな。とりあえず、そんな遠い所いないで、俺の隣に来いよ」

アスリーンはニヤニヤ笑って言うと、自分の右側を二、三回叩いた。

レシーは何か納得のいかないものを感じていたが、とりあえず動く。

どうせ嫌でも長く付き合わなければいけない相手だ。ここで不興を買ってもよくない、ともレシーは考えていた。

レシーがアスリーンの指し示した隣に來ると、アスリーンは嬉しそうにレシーの肩を抱いた。

なんだろう、この男は、馴れ馴れしい。レシーは眉根を少し寄せた。

「言ってしまうが、何でお前見てあいつらが何か企んでるとか思ったかって言うと、お前が俺の好みだからなんだよ。ついに色気作戦がきたのかと思ったわけなんだよ」

口には出しはしなかったものの、レシーは「は？」と言いたげな表情をしていた。

目を点にして、口を開いていたままにしている。

「まあ、そうでないならいいや。ああ、やっぱり女の感触っていいなあ。やすらぐー」

そう言うと、アスリーンはさらにレシーを抱き寄せて体を密着させてきた。

もうレシーは呆れて、そのままにしておいた。

別にそれ以上のことをするというわけでもなかったのですが、まあいいかと半ばなげやりな気持ちで。

「ところで、そろそろ聞いてもいいか？」

「あ？ ああ、俺がどういいうわけでここに居るかってことか？ 実
は俺もよくわかってねえんだ。田舎の集落の近くに置き去りにされ
ていたらしくて、それを育ててもらってたんだが、そこにいきなり
この奴らが来て、魔力がうんぬんとか言っつて、それからずっと俺
はここに閉じ込められてる」

「それは、何歳からだ……？」

「十二、三歳の時ぐらいかな」

「それから、ずっと……？」

自分なら気が狂うかもしれないな、レシーはそう思った。

アスリーン自身は何でもないことのように言うが、何だかそれは
自分の心を守るために、こういう話し方でごまかしているようにも
感じられてきた。

「あ、何？ ちょっと可哀想とか思っつてくれた？ それなら俺にも
うちよつと優しくしてくれてもいいんじゃない？」

心配をして損をしたかもしれない。レシーは少し呆れた。

しかし、実際少し同情の余地はあるような状況なので、少し大き
いレシーの肩に腕を回して、ぽんぽんと優しく叩いた。

「そうだな。ちょっとは同情してやろう」

アスリーンは少し驚いた顔をしていたが、またすぐに嬉しそうな
笑顔になった。

「おお、おお、嬉しいこと言っつてくれるじゃん。まあ、そんなこと
ぐらいしか言えなくて、逆に悪いけどな。次はお前のこと聞かせて
くれよ」

何だか、だんだんとアスリーンの扱い方がわかってきた。

そう思うと、何だか親しみが持てるように感じた。

しかし、油断もできないとは、レシーは思っつていたが。

「……そうだな……何から話そうか」

レシーは少し下を向いて、手探りするように話した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2379t/>

Resist

2011年8月18日03時20分発行